

識別番号	P 1 8	2010 年度完了学内共同研究
研究課題	「総合人間科学」の構築に向けて：「語り」をめぐる学際的研究の可能性	
研究代表者	田渕六郎（総合人間科学部社会学科）	
共同研究者	杉村美紀（総合人間科学部教育学科）、増渕幸男（総合人間科学部教育学科）、黒川由紀子（総合人間科学部心理学科）、荻野美佐子（総合人間科学部心理学科）、芳賀学（総合人間科学部社会学科）、栃本一三郎（総合人間科学部社会福祉学科）、岡知史（総合人間科学部社会福祉学科）、高山恵理子（総合人間科学部社会福祉学科）、平尾桂子（地球環境学研究科地球環境学専攻）、蘭信三（外国語学部国際関係副専攻）、坂本光代（外国語学部英語学科）	
Summary	This study investigated the possibility of laying the ground for “General Human Sciences”, focusing on the theoretical and empirical aspects of the study of human dignity and human development which is based on “narrative” inquiry as a methodological approach. It was found that a research collaboration of different disciplines such as psychology and sociology in collecting and analyzing narratives can yield significant findings with respect to policies and practices.	

研究の目的・背景

本研究の主たる目的は、総合人間科学部の基盤となる「総合人間科学」の構築に向けて、「人間の尊厳」「人間発達」に焦点を当てながら、総合人間科学の理論と方法の可能性を考究することである。総合人間科学の枠組みを探求する取り組みを通じて、それを学部・大学院教育ならびに社会還元へ架橋していく方法を検討することも本研究の目的である。

研究方法

本研究においては、理論面と経験・実践面の二つの側面から、研究課題に取り組んだ。まず理論面では、社会学や心理学などの各分野で取り組まれてきたライフストーリー、ナラティブ、ライフヒストリー研究にかんする理論枠組を批判的に概観しながら、領域横断的な理論枠組の整備を進めた。そのために、シンポジウムや研究会合を実施し、各領域における本分野の第一人者を招いて研究討論を行い、総合人間科学としての理論的アプローチの可能性にかんする考察を深めた。

経験・実践面では、上記の理論的枠組の検討に並行して、領域横断的な研究対象に相応しい具体的な研究分野を検討しながら、実際のライフストーリーデータの収集と共同での分析を進めた。具体的には、エスニシティ、マイノリティのアイデンティティといった、複数の分野にわたるテーマを設定した上で、ライフストーリーの探索的な収集と分析を行い、理論枠組の妥当性を評価した。また、こうした検討とあわせて、地域などでの継続的なライフストーリーデータ収集に際して不可欠な関連する団体・組織との連携を試み、データのアーカイブ化をめぐる調査なども行いながら、そうしたデータ収集や分析を学部教育などへ還元していくことの可能性を検討した。

研究成果

（1）理論面での研究成果

理論面での研究成果として、外部からの講師を招いたシンポジウム・講演会などを3年度に分けて実施し、それらを通じて、総合人間科学という新たな学問的領域を構想するために、これまで人文・社会科学の分野から人間にかんする科学として発展してきた諸専門領域を横断する視点、理論、方法論がどのようなものでありうるかを検討した。そこから、こんにちの人文社会科学においては、諸専門分野の特性と知見を生かしながら、個々の分野の単なる総和を超えた新しい知の生成が期待されており、とくにそれは、近年発展の著しい質的研究の領域において高まっているということが明らかになった。

本共同研究で得られた知見は大別して二つに要約できる。第一に、「総合人間科学」は異なる実質的な関心を有する複数の専攻、専門分野から構成されていることから、特定の対象について多角的かつ総合的な「語り」を収集し分析することにその理論的独自性を求めようということである。たとえば特定の地域や組織などについて、複数の分野の研究者の協働を通じて、多様な「問題」にかんする「語り」を収集・分析することで、複雑な問題連関を明らかにしたり、より効果的な実践のありかたを検討したりすることが容易になると期待できる。第二に、「総合人間科学」は、特定の「語り」をめぐる意味解釈という作業が分野横断的になされうることに注目し、実際に得られた「語り」を複数分野の研究者が共同で検討することを通じて、多面的かつ厚みのある意味解釈の可能性を探っていくことが可能だということである。これは特定の「問題」（たとえば、「文化的マイノリティ（社会的少数派）の経験」）にかんする「語り」を、分野横断的な解釈作業を通じて、より「深く」掘り下げていくという作業に相当し、「個々の専門分野の単なる総和を超えた新しい知の生成」を意味する理論的知見の生成につながりうる取り組みになりうる。

（2）経験・実践面での研究成果

「総合人間科学」構築に向けた経験・実践面での検討として、ライフヒストリー（オーラルヒストリー）のアーカイブ化にかんする現状の調査と関連する諸団体との連携を行いながら、実際に特定テーマのライフヒストリー収集と分析を共同研究活動として行い、教育への還元を視野に含めた研究を進めた。

坂本准教授と杉村准教授が中心となった、エスニックアイデンティティ、マイノリティ教育の分野に関連するライフストーリーデータの収集と分析では、留学生の移動についてのライフストーリー調査などが成果としてまとめられた。国際性、多文化性は上智大学の特徴であるとともに、総合人間科学部を特徴付けるキーワードでもあることから、文化的アイデンティティをめぐる語りをめぐる独自の教育プログラムを組織していくことが今後検討すべき課題であることが示唆されている。

団体・組織との連携としては、高山准教授が地域におけるアーカイブ化の調査研究を進めるとともに、田渕が中心となって、過疎化の進む地域でのライフストーリー収集に関する調査を行った。とくに後者では、過疎化の進む地域における「聞き書き」に大学生が関与することで、地域間交流、世代間交流という特徴を持つ独自の試みとして位置づけることを目指して連携および調査が進められた。今後こうした試みを学部レベルの教育実践として拡大していくために、2011年度教育イノベーションプログラムの支援を得て、総合人間科学部科目としてライフストーリーデータの収集を伴うフィールドワーク実習を開講することとなった。上智大学独自の教育実践として、地域というフィールドにおいていかなる「総合人間科学」の実践が可能かを検討していくことが今後の課題である。